

# 南アルプストンネル工事に着手

# 不安と懸念の声を受け止め、工事ストップを

東京と名古屋を結びリニア中央新幹線の2027年開業をめざし、JR東海は12月18日、山梨、静岡、長野の三県にまたがる南アルプストンネルを貫く工事に着手しました(山梨県早川町で南アルプストンネルの起工式)。新たに地下駅を造る品川と名古屋では2014年12月から資材置き場整備などの「準備工事」に入っています。南アルプストンネルは全長25キロで標高2500メートルを超える山々を貫く計画。トンネルの深さは地表から最大1400メートルに達し、日本の鉄道史上、最も難しい工事の一つになると予想されます。暮らしや自然の変化を不安視する住民も多く、環境保全の具体策など問題が山積するもとの工事強行です。

今回着手したのは山梨側(静岡県境まで)の7・7キロで、準備工事を経て、来年3月から、リニアの走る位置までの非常口を掘削、同9月にはそこから横に、本線

トンネルを掘り始める計画です。

南アルプスの地表から地下にかけて破砕帯(はさいたい)と呼ばれる無数の水の通り道があり、大量の水がトンネルに入ると、地表部の溪流が枯れ、生態系に悪影響を与える可能性があります。

JR東海は、南アルプスを水源とする大井川の流量が毎秒2トン減ると試算。トンネル掘削で出た水を導水路で大井川に戻す方針ですが、静岡市は「環境保全の面で十分とは言えない」と再考を求めています。

JR東海が早川町で10、11月に開いた3回の住民説明会でも住民から、山梨県側だけで約326万立方メートル発生する建設残土や、工事期間中、町内を通行する工事用車両が最大465台(1日に走行する片道台数)に上ることについて、「大きな影響はないと説明されたが信じがたい」と、交通環境の悪化や観光業、水源枯渇への影響を指摘、不安視する声が相次ぎました。

# 電磁波学習会に200人 リニアを考える岐阜県民ネットワー

リニア中央新幹線の岐阜県内の沿線住民らで作る「リニアを考える県民ネットワー」は12月6日、中津川市の中津川文化会館で、リニアの運行によって発生する電磁波(磁界)の勉強会を開き、県民ら約200人が参加しました。

法政大学講師の天笠啓祐氏が講演。「リニアは超電導で磁場を作って浮力を得ており、リニア車内や高压送電線、変電所周辺で電磁波が発生する。世界保健機関(WHO)の付属機関は電磁波を発がん性の可能性があると分類している」と解説しました。



また「N極とS極が変わる変動磁場が体に影響する可能性がある」とも指摘。JR東海などは、電磁波は国際機関の示すガイドライン以下としているが、天笠氏は「変動磁場の値は公表されておらず、影響は未知数」としました。

## リニア問題を考えるために 支部での学習で活用しましょう!

「月間学習」に、本村伸子衆院議員の論文が、  
「議会と自治体」に、「リニア中央新幹線問題を考えるつどい」  
の記録が  
それぞれ掲載されました。  
(どちらも2016年1月号)



本村伸子  
議会の記録

